

東京の手鞠歌

龍東生

左に記せるは、東京市内に於て、現今流行せる手鞠歌の一なりき。而してその曲は、女子が唱へる傍にて、勿卒の間に予が作りしものにて、少し如何はしきふしの無きにしもあらざれどその大體に於ては大差あるまじト思へり。もしたははめ所あらば、そは讀者にてよきなに計らひてよ。

ハ調

2. 4. 5 5 5. 3 | 5 5 | 5. 5 5. 3 | 5 5
 (一) △ カ ヲ ト ル | ホ サ ン | マ キ イ ヅ チ ヨ シ ン ジ ヨ

5. 5 5. 5 | 1 6 5 5 ||
 ヒ ト マ キ ナ ン ト コ ソ

(二) 5 3 3 | 5 5 3 3 5 4 | 5 5 5
 ニ ハ モ シ ン ジ ヨ シ ヤ ニ ハ ハ ガ マ

5. 5 5. 5 | 1 6 5 5 | 5. 5 5. 5 | 1 6 5 5
 ニ ハ ハ キ ホ ヲ ズ ハ ニ ハ ハ イ テ マ リ コ ソ

5. 5 5. 3 | 5. 5 5. 4 | 5. 3 5. 3 |
 シ ヤ ニ ハ ハ ガ マ ト マ タ テ ン ツ

5 5 5 ||
 カ ヘ ス

(三) 以下(二)ニ同シ

手鞠歌

- (一) 一向通るは坊さん、まき一ちよ進上、一まき何とこそ。
- (二) 進上、俺にははかぬ、庭はき坊主は、庭はいてまりこそ、俺にははかぬと、又でんぐり返へす。
- (三) 進上、俺産しない、身持女は産してまりこそ俺さんしないと、又でんぐり返へす。
- (四) 進上、俺鹽賣らぬ、鹽屋さんが鹽賣つて毬こそ俺賣らぬと、又でんぐり返へす。
- (五) 進上、俺ごばう賣らぬ、八百屋さんは何とこそ、ごばう賣つて毬こそ俺ごばう賣らぬと又でんぐり返へす。
- (六) 進上、俺ろをこがぬ、船頭さんは何でこそ、ろをこいで毬こそ俺ろをこがぬと、又でん

ぐり返へす。

(七)七はも進上、俺質をかぬ、貧乏人は何とこそ、質

をいて愁こそ、俺質をかぬと又でんぐり返へす。

(八)八はも進上、俺恥か、ぬ、乞食はなんとこそ、

恥かいて愁こそ、俺恥か、ぬと、又でんぐり返

へす。

(九)九はも進上、俺鉄持たぬ、百姓は何とこそ、鉄

もて愁こそ、俺鉄持たぬと、又でんぐり返へす。

(一〇)十はも進上、俺字は書かぬ、學者は何でこそ、

字書いて愁こそ、俺字か、ぬと、又でんぐり返

へす。

紀州の手毬歌。

(一)竹三本々々々、高野の山へ、竹三本、雉よ鷹よ
明日は殿御のお廻じや、何着てお廻じや、子供し

ゆの金袴黄色に染めて 菊の花十六 十六の娘が

紙屋へ嫁入つて 紙三帖貰うて、てゝに一帖は

ゝに一帖 一帖の紙を ぎじやゝとささむで

舐の穴へおしこみへしこみしたら 鬼が三匹で、

きて 其鬼のいふことにや 機からな(からねば)

出てけ(出て行け)糸とらなで、け鬼がころゝス

ットンゝ。

(二)鶯えゝ 梅の小枝へ晝ねして 晝ねの御夢に

なんと見た ゆーべ呼んだ花嫁御 奥の座しきへ

座らして 金欄鍔子を縫はすれば ほゝろゝと

なきやんす 何かなして(悲しくて)泣きやん

す わーしや所の千松は 三ツや四ツで金堀りに

金やないやら 死んだやら 一年待つても状や来
ず、二年待つても状やこず 三年目に状や来て 其
状の上はかきは、小万に來いと言ふ状で、小ま